

Title	吉田建一郎君提出博士学位請求論文「近代中国のタマゴ輸出貿易に関する研究」審査要旨
Sub Title	
Author	
Publisher	三田史学会
Publication year	2007
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.75, No.2/3 (2007. 1) ,p.186(366)- 191(371)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	彙報
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20070100-0186

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

そして併せて今後の活躍を期待するものである。

〈山本英史〉

吉田建一郎君提出博士学位請求論文「近代中国のタマゴ輸出貿易に関する研究」審査要旨

論文審査担当者

主査	慶應義塾大学文学部教授・同大学院文学研究科委員	山本英史
副査	東京大学大学院総合文化研究科教授	並木頼寿
副査	信州大学人文学部教授	久保 亨

論文の要旨

本研究は、一九世紀末から二〇世紀前半にかけて行われた中國の輸出貿易のうち、大量の鶏卵その他のタマゴとそれを加工したタマゴ加工品（乾燥卵、液状卵、冷凍卵）の輸出が当時の中国および世界の政治、経済、社会の動向とどのように関わりながら展開したのかについて明らかにしており、従来の近代中國經濟史研究が構築してきた既成概念に対し極めて斬新でかつ独創的な視点から一石を投じたものとして注目される。

全体の構成は以下のとおりである。

はじめに

- 一 本稿の目的と問題意識
- 二 近代中国のタマゴ貿易に関する先行研究の成果と課題
- 三 本稿の構成

第一章 中国産タマゴの世界への進出

- 一 一九世紀末—二〇世紀初頭の鶏卵輸出
- (1) 上海を中心とした輸出の本格化
 - (2) 養鶏の形態
 - (3) 鶏卵の流通と消費の概況
 - (4) 天津における輸出の本格化とアメリカ向け輸出の増加
- 二 鶏卵加工品輸出の始まりと本格化
- 第三章 第一次大戦後のタマゴ輸出の展開
- 一 鶏卵加工品の輸出の展開
 - 二 鶏卵輸出の動向
 - 三 日中戦争後の動向
- 第三章 戰間期のタマゴ輸出と養鶏業の発展
- 一 はじめに
 - 二 タマゴ輸出の本格化と戦間期の変動
 - 三 専門誌の養鶏業批判と發展策の提起
 - 四 南京国民政府期における鶏卵増産の試み
 - (1) 南京国民政府の養鶏改良への関心
 - (2) 多産卵鶏の普及活動
 - ① 農業推広工作における活動
 - ② 郷村建設運動における活動
 - ③ 普及活動に対する評価
 - 五 おわりに
- 第四章 日本の青島占領期（一九一四—二二年）前後における山東タマゴの対外輸出

- 一 はじめに
- 二 山東産タマゴの対外輸出の本格化
- 三 山東における養鶏の展開と鶏卵の流通経路
- 四 第一次大戦勃発後の山東タマゴ
 - (1) 乾燥卵貿易の変動
 - (2) 日本向け鶏卵輸出の活況
- 五 山東還付後のタマゴ輸出
- 六 おわりに
- 第五章 近代中国のタマゴ輸出貿易史と邦文資料
- 一 戦後日本の中国産タマゴに関する一一点の調査報告
 - (1) はじめに
 - (2) 日中戦争前の調査報告
 - (3) 日本の中国侵略と調査報告
 - (4) おわりに
 - 二 雜誌『養鶏』について
 - (1) はじめに
 - (2) 中国側の動向に関する記事
 - ① 記事目録
 - ② 三つの注目点
 - a 鶏卵の形態の相違 b 輸送法の相違 c 在来の乾燥卵製造工場の実態
 - ③ 中国産タマゴに関する記事
 - 三 四つの注目点

- a 世界の鶏卵貿易網の存在
- b 欧米のタマゴ消費における中国産品の位置
- c 欧米諸国における養鶏業の発展状況
- d 近代日本と中国産鶏卵加工品との関係

(4) おわりに

三 『青島実業協会月報』について

(1) はじめに

(2) 解題

(3) 記事目録

四 農林省畜産局『本邦ニ於ケル鶏卵加工品ノ利用ニ關スル

調査』について

- (ア) はじめに
- (イ) 刊行の経緯
- (ウ) 内容紹介
- (エ) おわりに

おわりに

文献目録

最初に各章で展開されている論点の概要を述べたい。

「はじめに」においては、吉田君がなにゆえ一九世紀末から
一〇世紀前半の中国輸出品のなかでタマゴに焦点を当てたかに

ついて以下の四つの問題意識を挙げている。第一は中国が世界
市場へ実質的に統合される契機となつたとされる一九世紀末の

輸出貿易構造の変化がどのような歴史的意義を持つのかを考えるに当たつて具体的なモノに即して検討したいという点である。この問題について従来は茶や生糸に代表される特定産品が研究対象にされ、それらを通した貿易構造が明らかにされてきたが、タマゴもまた中国の代表的な輸出品としての地位を占め、当時の中国農民の世界市場との新たな面の結びつきを知るための適材になりうると考える。第二は人間生活を取り巻く衣食住のうちの「食」の領域における近代中国と世界市場との関係を具体的に描き出したいという点である。これまでには生糸・絹織物や綿糸・綿織物といったどちらかといえば「衣」の領域に力点が置かれてきたが、それに対してタマゴは「食」の領域を描く代表になりうると見る。第三は近代中国における畜産業の展開について実態を明らかにしたいという点である。これまでの産業史研究においては纖維分野に豊富な蓄積があるものの、輸出産品生産基盤としての畜産業そのものの動向にはほとんど関心が向けられてこなかつたという。第四は戦前期に刊行された邦文文献が中国近代史研究において有する新たな可能性を具体的に提示してみたいという点である。ここでは中国タマゴ貿易に言及した様々な邦文調査資料を紹介し、それらを活用することを通してその史料としての有効性を主張したいという。

以下、本論では上記の問題意識に沿つた論述が進められていく。

第一章では一九世紀末から第一次大戦直前までを時間軸として、中国産タマゴが本格的に世界へ進出していく過程を、鶏卵

と鶏卵加工品とに分けて概観する。ここでは一九世紀以降、農家養鶏が広範囲にわたって発達していた中国において輸出品目の多様化が進むなか、上海を中心とする中国の港から日本をはじめ、香港、英領海峡植民地、ロシア、マカオ、アメリカ合衆国などに向けて鶏卵の輸出が活発になった事実を明らかにする。また、ヨーロッパ資本による中国国内での工場設置が引き金になつて製造が始まった鶏卵加工品輸出が一〇世紀以降、主としてイギリスやドイツを中心とした欧米諸国に向けて本格化した経緯を紹介する。さらに、近代中国における養鶏は農家の副業としての小規模經營が広範囲に展開していた点に大きな特徴があり、各農家で生産された鶏卵は仲買者の手を経て輸出港や加工品製造工場へ運ばれたことを論ずる。

第二章ではタマゴ貿易にとって大きな転換点となつた第一次大戦の勃発から日中戦争の開始前後までを時間軸として、鶏卵と鶏卵加工品の輸出がどのように展開したのかについて輸出市場と中国国内双方の関係部門の動向を織り交ぜながら概観する。ここではまず一九二九年にタマゴ輸出額が中国の全輸出品目中の第三位を占め、中国の代表的な輸出品になつたこと、そして食用のみならず工業原料として広く国際市場で受容されたことを指摘する。また、この間の世界各国における養鶏業の発展や中国産タマゴに対する高率関税の賦課といった中国にとつての逆風の発生、輸出における仕向け先の変化、および取り扱い商人の国籍の変化などを具体的に明らかにする。

第三章では兩大戦間期の中国における養鶏業発展の実態と特

徴について、同時期のタマゴ輸出の動向と関連づけながら考察する。タマゴ輸出が国際市場からは様々な逆風を受けるなか、中国において養鶏業の現状を問題視して新たな発展を目指そうとする議論と実践が展開した経緯を詳述し、その発展の形態は畜産業の発展段階を經營規模に求めがちであった従来の見方を相対化しようと評価する。また、今後の近代中国経済史研究においては家畜が持つ用畜としての側面を積極的に議論の中心に据えていくことの必要を強調する。

第四章では、タマゴを介した近代日中関係の実態を解明しようとする問題意識の下、日本の青島占領期前後の山東産タマゴ輸出の動向について、同時期の山東における落花生関連品の輸出動向を意識しながらその実態を明らかにする。そして山東経済に関する日本経済史研究が提示した戦後恐慌と山東還付の歴史的位置付けについて今後はより多角的に再検討する必要があると主張する。また、近代中国のタマゴ輸出貿易史の研究において特定の地域に焦点を当てることが新たな史実の開拓に有効である点を確認する。

第五章では、近代中国のタマゴ輸出に関する戦前期刊行の邦文資料を複数取り上げて、それらの内容や刊行の背景を紹介するとともに、これらが近代中国のタマゴ貿易史、ひいては近代経済史の研究に大きな役割を果たすことを述べる。

最後に「おわりに」では、とりわけ近代中国経済史研究における畜産業の意義について触れ、中国のタマゴ輸出の活発化が世界市場の政治、経済、社会にインパクトを与えた、それに対す

る世界市場の反応が中国の関係部門に影響を及ぼし、さらにそれに中國が反応するという相互作用が見られた事実は畜産業の研究に大きな意味があることを示している旨を再確認し、今後その分野の個々のモノを軸に据えた研究を充実させる必要を説く。

審査結果

本論文の優れた点は大きく分けて次の四点である。

第一は、タマゴという、これまで近代中国の貿易史研究においてほとんど注目されてこなかった产品を取り上げ、その貿易の実態を紹介し、さらに貿易全体に占める意義を明らかにして新しい研究視角を開拓したことであり、これは高く評価されてよい。とりわけ生の鶏卵輸出貿易に関してはこれまで全く研究がなく、それを学界に紹介した意義は大きい。

第二は、庭先放飼いを基本とする中国のタマゴが単に安価だったのみならず、黄身の濃さが業務用に適しているといった質の面でも独自の特徴をもち、歐米とアジアを中心形成された世界のタマゴ貿易ネットワークの一角を占めたことなど、中国農民の世界市場との関わり方の具体的な接点として養鶏業や鶏卵輸出を検討したことであり、その意義もまた大きい。近代中国経済と世界市場との相互作用の問題は様々な視点から検討されるべきであり、本論文はタマゴという产品を媒介にそれを具体的に解明した点で先駆的かつ独創的である。

第三は、タマゴ貿易を介して近代日中関係史に新たな問題を

提起したことである。従来の日本経済史研究が示してきた当該時期の山東経済に関する見方を再検討するとともに、近代中国のタマゴ貿易史において特定地域に焦点を当てることの有効性を指摘するなど、本論文が発信する諸点は今後検討すべき重要な課題を提供している。

第四は、多くの埋もれていた戦前期の邦文資料を積極的に発掘して学界に紹介し、史料としての再評価を試み、その有効性を提示したことであり、これもまた大いに評価すべきである。

本論文はこのうち調査報告や専門雑誌において中国タマゴ貿易に言及した記事を実践活用した好例であり、このような分野の史料開拓と利用の方面でも今後大きな影響力を持つと考えられる。

つぎに本論文の問題点と課題について若干触れておきたい。

1 まず構成上の問題である。第一章と第二章とが時系列に配置されているのに対し、第三章と第四章とは時系列上逆の関係になつてている。恐らく第三章が全国的な養鶏業の展開過程を論じたのに対し、第四章は地域的に限定された山東産タマゴの専論になつていているためと推測されるが、そのような事情があるにせよ、時期によつて異なる世界市場の構造とその経済に呈する規定性をどう理解するかという問題とも関連し、論旨が伝わりにくく構成になつていて。

2 同じく構成上の問題である。本論文の魅力の一つは上記のように戦前期の邦文資料を積極的に活用したことにある。なら

ば、それらの解題と価値については序論で述べるべきであり、詳細な記事内容等に関しては資料編として附録するべきであつて、いざれにせよ本論文の第五章に収めるべきものではないと判断される。

3 つぎに内容上の問題として、世界市場と中国経済の相互関係について一層明確に整理することが望まれる。日本の市場において日本国内の農業利害との対抗関係が生じた鶏卵輸出に対し、欧米市場向けの鶏卵加工品輸出は欧米の食品加工業界との対抗関係が主軸になつており、異なる様相を呈していたように見受けられる。だとすれば、一九世紀末から二〇世紀初めに成立した多角的貿易決済機構のなかにおいて中国のタマゴ貿易が占めた位置は二つの局面に分けて考える必要がないだろうか。

またタマゴ貿易を通じて流入した外貨はどのように使われていたのか、中国国内の流通業者の資本蓄積は産業発展に向かつたといつてよいのか、第一次大戦期以降の変化をどのように位置づけ、世界恐慌の影響をいかに総括するのか、など多くの疑問が未解決なままに残されている。

4 同じく内容上の問題として、中国経済史においては地域をより慎重に扱つていかねばならない点が挙げられる。例えば第四章で取り上げた山東に関して言えば、なにゆえに山東をことさら取り上げたのが明確にされていない。少なくとも上海を中心とする江南との比較検討は不可欠であろう。また地域による差異を意識すれば、北京近郊の調査結果を全国的な評価として認めることにも再考の余地が生じるであろう。

5 本論文で触れた養鶏業について言えば、これはいわゆる畜産業を代表するものでは必ずしもなく、その意味で「近代中国における畜産業の展開について実態を明らかにしたい」という点での全体的な研究は今後の展開に委ねられているといえよう。

以上、本論文にはまだいくつかの遺された課題が存在する。しかしながら、本論文が提示した多くの論点が従来の近代中国经济史研究に新風を送り込んだことは紛れもない事実であり、それは十分評価に値すると考える。同君は今後具体的なモノとしてタマゴのみならず、皮革から豚毛などに及ぶ畜産品全体に視野を広げ、中国の畜産業と畜産貿易の本格的な実態究明に研究を深化させていく予定であるという。

いざれにせよ、本論文は新時代の日本の中国近代史研究を負つて立つ有望な若手研究者の一人が著した魅力溢れる研究である。それゆえ審査委員一同は本論文が博士（史学）の学位を授与されるに十分な資格を有すると判断する。

〈山本英史〉